

# SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

## 月刊シナピスニュースレター

Vol.  
109

2025. 6

年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～



作：有谷絢（阿倍野教会）

このイラストにはエピソードがあります。3 ページをごらんください。

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。  
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、  
愛し合うように願って平和の種をまき、  
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区  
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203  
Email/sinapis@ostk.catholic.jp  
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

# 卷頭言



平和の礎(いしじ)

## 「戦後80年 特別な沖縄慰霊の日」

芦屋教会 川邨 裕明神父

今年も3月に沖縄平和学習を実施しました。戦後80年に当たる年に選んだテーマは、「米軍上陸地点から終焉の地まで、激戦地を巡る」でした。

上陸地点の一つである渡具知公園にある記念碑から旅を始めました。

激戦地はいずれも小高い丘にありました。映画にもなった「ハクソー・リッジ」(浦添大公園・前田高地)から北を望むと、嘉数高台公園から上陸地点が一直線に見えます。その間を逃げ惑う住民の姿さえ目に浮かぶようです。

沖縄住民の4人に1人が亡くなったことも実感できました。沖縄戦の終焉の地、戦没者の名前が刻まれた摩文仁の丘で祈りを捧げました。

今年、6月23日、沖縄では慰霊の日を迎えます。戦後80年ということで、前田万葉大司教、酒井俊弘司教がそろって沖縄を訪問されます。

世界中で同じような激しい戦いが繰り広げられている今日、沖縄の地に立つと、住民が戦いに巻き込まれ犠牲になる戦争の本質が見えてきます。沖縄から平和を訴えることは、大きな意義があります。

大国がエゴをむき出しに、自国の利益確保に走る現状に対して、琉球王朝が示した平和外交は、私たちにとって学ぶべきところがたくさんあります。

琉球の歴史を継承している沖縄、広大な米軍基地を抱え数々の問題が起きる中、粘り強く基地問題と向き合う沖縄の現在を学ぶことで、世界への向き合い方を学ぶことができます。来年の沖縄平和学習は、辺野古をはじめ基地問題について学ぶ旅となります。

阪神地区では、平和月間の取り組みとして、6月22日14時からカトリック芦屋教会にて、平和学習会を開催します。

「戦の少年期」という絵本を通して、戦争に巻き込まれる人々の日常を学び、沖縄戦下の子どもたちに焦点を当てたDVDを鑑賞し、今年の沖縄平和学習の旅の報告を行います。



ひめゆりの塔

## 2025年沖縄平和学習に参加して

いとう ひろこ  
伊藤 浩子（宝塚教会信徒）

沖縄といえば、美しい海、首里城、ひめゆりの塔、そして米軍基地があることが思い浮かびます。

恥ずかしながら、私は沖縄の悲しい歴史をあまり詳しくはわかっていませんでした。平和学習に参加して更に、戦時中、沖縄で起こっていたことについて何も知らなかったことに気付かされ、米軍基地の問題についても自分のこととしては考えていなかったことを思い知らされました。

現地では、同じカトリック信徒の方がガイドとしてツアーに加わってくださり、行く先々の案内はもちろんのこと、沖縄の歴史やご自分の体験を通して、沖縄の一市民としての率直なお考えを分かち合ってください、沖縄の現状も垣間見ることができました。

バスで米軍基地を外から見てまわりました。基地はフェンスで囲まれています、フェンスの先端の「忍び返し」がまるで刑務所の塀のように市民が住んでいる側に傾いていました。市民側からすれば、ある意味、それは威嚇されているようにも見え、いかにも基地優勢であるのを感じずにはいませんでした。

2日目に、嘉手納基地に近い道の駅「カデナ」で昼食をとった時のことです。1時間も滞在していなかった間に、米軍のジェット機が2回騒音をたてて飛んで行きました。ガイドの方によると、これが日常茶飯事のことだそうです。一番印象に残っているのは、ひめゆりの平和祈念資料館を見て、糸数アブチラガマに実際に入って中を歩いたことです。真っ暗で懐中電灯なしでは前に進めません。

現在は歩きやすくなっていますが、戦時中はたぶん裸足でゴツゴツした石の上を歩いたに違いありません。全長約270mの洞窟の中に当時約600人の傷病兵が運び込まれ、ひめゆり学徒隊の少女たちが世話をしながら、生活をしたのです。暗闇の中でいつ終わるかわからない戦いを続けていたのを想像するだけで、胸が痛みました。

沖縄では桜前線は北から南へと移動するそうです。本州に住んでいると桜前線は南から北へと移動するのが当然と思っていた認識を覆しました。一つの事象をとっても、自分の立ち位置が違えば、自分が常識だと思っていたことも違ってくるのです。お互いの違いを尊重し合うことの大切さを改めて感じました。

毎日ごミサに与り、ツアーに参加したメンバーとの交流もでき、平和について考える機会をいただけたことに感謝いたします。

編集注:アブチラガマ(アブ:深い縦の洞穴 チラ:崖 ガマ:洞窟やくぼみ)

## 表紙の絵のエピソード

ありたに あや  
有谷 綱（阿倍野教会）

バート司教さまが初めて沖縄に来たととても暑い日に、バス停でバスを待っていました。汗を流しながらだ  
いび疲れていたということでした。

そこに、一人のおばあがやって来て隣に座りました。汗を流す外国人の青年を見て、おばあは自分の扇子で  
司教さまをあおいでくれたそうです。

司教さまがおばあを見ると止めてしまいましたが、また前を向くと同じようにあおいでくれました。

司教さまは「自分は過去に沖縄を攻めたアメリカ人なのに、その私をこのおばあは扇子であおいでしてく  
ている」と思ったそうです。

見た目でアメリカ人かの判断は出来なくても、どう見ても外国人で欧米人です。

嫌悪感のようなものを向けられても仕方ない自分に、優しくしてくれるおばあ。

その優しさに触れて司教さまは、「沖縄の人々のために何かしたい」と強く思ったようです。

聖書のなかに“憐れに思う”という言葉があります。

これはギリシャ語で“スプラクニゾマイ”といい、直訳は“内臓が揺すぶられる”という意味です。日本  
語にはない表現のため“憐れに思う”と意識されています。

このギリシャ語とよく似た意味のものが沖縄の言葉で“チムグリサ”といい、直訳が“内臓が揺さぶられる  
ほど何かをしてあげたいというような気持ち”。

あの時のおばあは、きっと“チムグリサ”で、司教さまは“スプラクニゾマイ”。

お互いにこの人のために何かをしたいという気持ちだったと思います。

“スプラクニゾマイ”、“チムグリサ”は皆さんのなかにもきっとあります。

一人一人がこの気持ちを持つことが平和な未来へ繋がっていくのではないのでしょうか。



### バート司教の平和メッセージ(2023年)から抜粋

「我々は大砲の餌ではない！ 平和の架け橋・万国の津梁だ！」

#### 大国の狭間からの叫び

もう、戦争はいらない。	ただ、平和に生きたい。
もう、悲しみはいらない。	ただ、すべての国との友愛関係に生きたい。
もう、抑圧はいらない。	ただ、わが子々孫々と共に未永く生きたい。
もう、差別はいらない。	ただ、大空、地、海と共に優しく生きたい。
もう、基地はいらない。	ただ、「いちやりばちよーでー(*1)」のこころで生きたい。
もう、砲弾やミサイルはいらない。	ただ、「ぬちどう宝」の精神、
我々を大砲の餌として利用するな！	「ちむがなさ(*2)」のまごごろを生きたい。

\*1：(一度) 出会ったならば、みな兄弟 \*2：相手の痛みを深く感じる愛

#### 平和のいしずえ・沖縄からの祈り

すべての戦争犠牲者の霊魂を抱くこの地を、父よ、あなたの御手に委ねます。  
戦禍をかいぐり、いのちを繋いでくださった先祖の労苦を顧みてください。  
父よ、あなたの御手に委ねます。いまを生きる者が二度と戦禍に逃げ惑うことがありませんように。  
父よあなたの御手に委ねます。再び沖縄を大砲の餌とさせないため、軍事基地のいら  
ない  
和解と友愛の拠点としてください。  
父よ、あなたの御手に委ねます。戦争への備えは、戦争のはじまり。戦争への備えは、必ず戦争に  
つながることをすべての人に悟らせてください。  
戦争への備えをすべて放棄した平和な世界を切望しつつ、父よあなたの御手に委ねます。

## 帰天された教皇フランシスコに感謝をこめて

まつうら けん  
松浦 謙神父

世界のカトリック教会を12年間、導いてくださった神のしもべフランシスコ教皇様に心から感謝します。

その名の通り、アジジのフランシスコの精神が、教皇様の生き方、ことばと行いに、色濃く現れていました。

いつくしみ深い父である神様への信頼。とりわけ貧しい人々に寄り添い、共に歩もうとされたこと。そのために教会が「野戦病院」になるように呼びかけたこと。自ら清貧に生きたこと。創造主を賛美し、神様が与えてくださったかけがえのない地球を「共に暮らす家」と呼び、大切にするように呼びかけたこと。誰をも愛すべき兄弟姉妹として受け入れ、争いのない平和な世界の実現を目指したこと。そして世界各地に出向き、よろこびの福音を<sup>あく</sup>倦むことなく宣べ伝えられたことなどです。



ご高齢であったにもかかわらず2019年に訪日され、いのちの大切さを説き、わたしたち日本の教会を元気づけてくださいました。

また第16回シノドスにおいて、教皇・司教・司祭・修道者・信徒が霊的な対話を進め「共に歩む教会」を目指したことは画期的なことでした。

これらの教皇フランシスコの事績、メッセージは、わたしたちの心に大きなインパクトを与えました。それらは、大阪教区で始まった新生計画にうたわれる「谷間に置かれた人の心を生きる教会」「交わりの教会」「共同責任を担う教会」を目指す上で、励ましと支えになっています。

「いかなる場所でも懸命に平和の種を蒔きなさい」(\*)と言われた教皇フランシスコの言葉を心に刻み、神の国に向かって日々力強く歩んで参りたいと思います。

シナピスが福音の“からしだね”となって、豊かな実りを結ぶことが出来るように祈ります。

\*使徒的勧告「喜びに喜べ」88 参照

シナピスニュースではこれから、フランシスコ教皇の思い出を紹介するページを続けてまいります。励まされたこと、救われた言葉、目を開かれたエピソードなど、ぜひ事務局までお寄せください。

郵送、FAX、メール、なんでも結構です。お待ちしております。



## フランシスコ教皇の思い出①

### 《イラン人の難民さんたち》

「これまでの教皇とは違うやり方で多くのことを変えた方。  
教会に変化を求めた方だった」  
「カトリックの世界にとどまらず、別の世界や宗教との対話を  
求めた素晴らしい方だった」  
「多くの人の力になった方だと思う。特に、アメリカに対してははっきりと発言されたことには  
カづけられた」



### 《シスター マリア・コラレスさん(聖母被昇天修道会)》

「コンクラーベで教皇に選ばれそうになった時、『貧しい人たちを忘れないでね』と親しい枢機  
卿に言われて、ショックを受けたそうです。貧しい人だったアシジの聖フランシスコを思い起こし  
教皇名に選んだ時には、教会の改革すべきところ、進むべき道が直感的に見えていらした。  
最初から、『私は貧しい人たちのための貧しい教会がほしい』と言われ、ずっとその線でいらした。

就任直後の聖木曜日、刑務所へ行って洗足式を行いました。信者ではない女性の足を洗って接  
吻したことを批判されたけれど、ほとんど毎年行かれていたみたいです。

亡くなる数日前にもある刑務所を訪問し、励ましを送られました。『あなたたちが中心です』と。  
方向づけだけではなく、自分の生活をもって、実際の動きをもって示されたパパ様でした。

もう一つは難民のこと。最初の旅行先が地中海のランパドゥーザ島(北アフリカから最も近く、ヨ  
ーロッパを目指す移民・難民の目的地)。海の事故で命を落とす難民が後を絶たず、同じ船で半  
分の仲間を失った難民たちを励まされました。『あなたたちが私の中心』と語り、最後まで難民  
たちを優先される姿勢を変えませんでした。最初の訪問先に、立派なところではなく、この島を  
選んだこと自体が、わたしたちへのメッセージだと感じています。

教会は、教えや要理、儀式や秘跡が中心ではないこと。神の愛がすべての人—とりわけ貧しい人  
たちに注がれていることを信じて、貧しい人たちを優先するキリストの生き方になって、彼ら  
を中心に、彼らの言うことをよく聴いて、彼らから学ぶように教会が変わっていくべきと、教え続  
けられました。

2024年12月、火災から5年をかけた改修が終わり、ノートルダム大聖堂の落成を祝う式典と  
ミサに招待されたのに、行かれませんでした。なぜ行かないか、言われませんでした。

数日後、イタリアから近い小さなコルシカ島(フランス領)を訪問されました。貧しい人たちがたく  
さん住むところで一緒に過ごされました。行かないという選択の答えを示されたと思います。

亡くなったけれど不思議と淋しくは感じません。近くに、私の中にまだいると感じられるから。  
フランシスコが、キリストの生き方を選び、どう言われてもその生き方を生き抜いたことが心に  
残ります。



## 「働くこと」とメンタルヘルス

徳島教会 よしみ りんたろう 嘉 凜太郎

私は現在、臨床心理士として精神科病院に勤めています。

メンタルヘルスにかかわる疾患や障害は、大まかに「急性期」、「回復期」、「慢性期」という経過をたどっていきます。多くの方は急性期に専門的な治療を受け、回復期になると日常生活に戻ったり地域での生活を立て直すためのリハビリをしたりします。

回復期において、成人で職に就いている人であれば復職を目指し、新たな職を求める人は就職活動をします。私は復職を目指す方にかかわることが多いのですが、ある程度の休養を経てスムーズに復職する方もあれば、繰り返し休職が必要な方や、復職してから仕事が続かないという方もいます。

働くことが難しい時期が長くなると、他の日常生活にも影響する方もいます。一方で、仕事を変えたり、働き方を変えたりしたことで元気になる人もいます。それだけ、「働くこと」が私たちの生活にとって大きな役割を持っているのかもしれませんが。

また、働くこととメンタルヘルスの問題は個人に限定されることではなくて、社会構造も大きくかかわっています。労働環境や待遇が整っていなければ、本来私たちの生活にとって大切な「働くこと」自体が苦痛となってしまいます。

先日、私たちに新しい教皇様が与えられ、教皇名が「レオ14世」と発表されました。

以前、教皇名として「レオ」を名乗られた教皇レオ13世は、社会問題を初めて説いた「レールム・ノヴァールム」という回勅を出されました。この回勅では、労働者に関する社会正義について説かれているそうです。またこの回勅は教会が現代社会に対してどのような姿勢を示すのかという、記念碑的な存在だそうです。ここでもやはり、「働くこと」が私たちの生きる世界にとって重要であると感じます。

私たちは「働くこと」を通じて苦痛を感じる時もあれば、喜びを得る時もあります。この世界で生きていくことと密接にかかわっています。

「働くこと」を通して受ける恵みを、多くの人と分かち合っていけたらよいなと思っています。



まつうら けん  
松浦 謙神父(シナピスセンター長)

皆さまは「シナピスの風」を教会の掲示板で見かけられたことがありますか？

今月の祈りと、シナピス・ホームの予定、シナピスの主催、あるいはおすすめの記事紹介、ニュースの目次などを載せたA3サイズのかわら版のようなものです。大阪高松教区の全教会に送って掲示をお願いしています。

この「シナピスの風」ですが、点字版を作り、ニュース同様、すべての教会に「フレンドリー点字部」のご協力によりお送りしています。発刊から15年ほどがたち、先月号は第179号でした。

この点字版について、最近、いくつかの教会から、「うちには点字版の必要な人はいませんから送付無用です」とのご連絡をいただくことがあります。この件について、シナピスの考えをお伝えし、みなさんにご理解いただきたいと思い、このページを用意しました。

15年前は今とは違い、スマホ・パソコンの音声読み上げ機能がほとんど普及していなかったため、視覚障害者の中で点字情報を必要とする人の割合は高かったそうです。(諸説ありますが、現在、点字を使う視覚障害者は15%、日常的に使用する人は10%程度とされています) 当時は、この点字版を実際に必要とされる方が教会の中にいらして、当事者の意見や要望に応える形で、点字版を送付することになりました。

時が流れ、教会一般の情報は音声から得られる機会が増えました。点字に関しては、「聖書と典礼」の点字版は、依頼した視覚障がい者の元に直接届けられ(小教区負担)、教区から発信される文書については、「情報開示」の姿勢に基づいて、力障連フレンドリー点字部から必要とされる方に送られているそうです(教区負担)。

また、教区報(教区負担)とシナピスニュース(シナピス負担)は、現在、希望される8名ほどの方にお送りしていることがわかりました。

私たちシナピスとしては、アクセスしやすい情報の少ない社会活動に関して、今も点字を必要とする方々に伝え続けたい想いがあります。「必要な方がいないので無駄になっている」という小教区の現状は確かにそうなのでしょうが、それでも「今必要な人がいなくても(存在を忘れずに)」、「必要な方が来られた時にすぐお渡しできるように」、「来たいと思う教会であるために」点字版を活用してくださることを願っています。紙の無駄よりも、視覚障がい者との間のバリアをなくす取り組みを優先すべきと私たちは考えます。

今回、この記事を書くにあたり、教区の「障がい者委員会」のメンバーから以下のご意見をいただきました。「視覚障がい者は、目の見える人からの情報が必須です。そこに、『シナピスの風』があるかどうかはわかりません。ゆえに、目の見える人が視覚障がい者に、こんな小冊子もあるんだよと伝えることが必須なのです。そして毎回必ずこれを伝えることが、情報保障につながるのです」

「相手の立場に立つ」。簡単に口にしがちな言葉ですが、点字版について振り返る中で、改めて考えさせられることが多くありました。

小教区でもご再考ください。そして検討されたご意見・提案などをシナピスまでフィードバックしていただければ幸いです。点字版に限らず、活動について振り返る機会をいただけるのは、シナピスにとってもありがたいことです。

## ガザの子どもたちの苦しみと共に祈る

シナピス運営委員 にしぐち のぶゆき 西口 信幸

彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、  
太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。  
玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、  
神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。

ヨハネの黙示録 7:16-17 (復活節第4主日第2朗読より)

トランプ大統領就任祝いの「停戦？」と同じように、イスラエルは、中東ディールの間は目につかないように殺戮しつつ、サウジアラビアにガザ問題を棚上げさせることに成功しました。

5月15日のナクバ(大惨事)の日、民族追放のため最後の「ギデオンの戦車」作戦を始めました。

トランプが中東のリビエラ作りに入るため、アメリカ官民総がかりのG H F(ガザ人道財団)と協調して、人道支援と称する強制収容所、また他国への移送計画(民族浄化)が準備されています。国連や心あると思われている世界の指導者も形だけの拒否発言はあるものの、制止に向けた動きは一切なく、逆にそれを容認するような動きさえあります。真実が報道されないまま、西岸地区を含めたパレスチナ民族の滅亡に向けて最後の動きに向かおうとしています。一年以上に亘り報道されない真実を限られた紙面で伝えるように苦労してきましたが、あまりに多くのことが世界の暗黙の了解の中で行われている今は、私には全てを伝える術がありません。

今月は、国家権力の動きではなく、前からお伝えしたかった、77年の間、世代を越えて、命をかけて民族の魂を持ち続けようとしている人の生の声をいくつかお伝えしたいと思います。

テレビ報道の数で語られる殉教者や飢餓の映像に慣れた私たちですが、何気ない生活の中の言葉で語られる一人ひとりの「物語」を通して、数ではない人のいのちという神聖な事実を見過ごしていることに、改めて気付かされます。テレビの中の一人ひとりとの出会いがありますように！

### 「飢餓はすべてを壊す」：絶望的なガザの人々は食料を求めて奔走する

「お肉は天国でしか食べられないの？」と聞く甥にうまく答えられない

ハラ・アル＝ハティブ (ガザの作家、英文学専攻) 2025年5月10日 アルジャジーラ英語版

3月2日、ガザへの全ての検問所が封鎖されたとき、2週間以上続くことはないだろうと思っていました。生き残った親戚をイフタール(断食明けの食事)に招き、普通のラマダンを過ごしたいと願っていました。しかし、神聖なこの月を、缶詰で断食を終えることになったのです。封鎖後の数日で、市場から食料が姿を消し、食事の回数を減らすようになりました。恥ずかしさと悲しみを抱えながら、パン屋や慈善厨房の前で何時間も列を作って並びます。3月31日、すべてのパン屋、慈善厨房も次々と閉鎖、飢饉の兆候は至るところに見えるようになりました。最もつらいのは、小さな子どもたちに飢饉を説明しなければならないことかもしれません。5歳のハーレドは、母親のスマホの写真を見つめて、天国にいる殉教した父と「一緒に食べられる番はいつ来るの？」と聞いてきます。彼に「我慢してね。我慢した分だけ報われるよ」としか言えないのです。毎日、飢餓と絶望の光景を目の当たりにして、無力さに打ちひしがれます。そして問いかけます――子どもたちの体がどんどん痩せ細り、ゆっくりと死んでいく姿を目の当たりにしながら、どうして世界は沈黙を保てるのか？

### アイダ・アブ・ラヤラ（42歳）の苦しみ

「小麦粉もパンもなく、子どもたちに食べさせる方法もない。炎天下で、時には凍えるような寒さの中で何時間も立っている」と、ガザ中央部のヌセイラット地区に住むラヤラは言った。ラヤラの家は空爆で破壊され、一家は現在、薄いナイロンシートのテントで暮らしている。ある日、彼女は立ちっぱなしで足がふやけて、3時間待った。ようやくカウンターにたどり着いたときには、食料は残っていなかった。「手ぶらで家に帰った。子どもたちは泣いていた……その瞬間、子どもたちの空腹をもう一度見るくらいなら、いっそ死んでしまいたいと思った」

### ユセフ・アル＝ナジャーラ（8歳）の一日

ユセフは夜明けとともに、裸足でボロボロの鍋を握りしめてガザ市のコミュニティ・キッチンまで走っていく。「自分の番が回って来ないのでは、と恐れて、人々は押し合いへし合いしている。小さな子どもたちが倒れているんだ」とユセフが言った。「時々、混乱の中で鍋が手から滑り落ち、食べ物が地面にこぼれる。」  
「手ぶらで家に帰る……その苦痛は飢えよりもひどい」と彼は語った。父親が爆撃で殺された後、ユセフの肩には責任の重さがのしかかった。ユセフの夢はおもちゃやゲームではなく、母と妹と一緒に食卓を囲み、平和に食事をする事だ。そのために毎朝、彼はコミュニティ・キッチンに駆けつける。



焼かれ、切断される—イスラエルの残忍な戦争の矢面に立たされるガザの子どもたち  
保健省によれば、イスラエル軍によって16,000人以上の子どもたちが無惨に殺害され、1,000人をこえる子どもたちが手足を切断されています。

3月、ガザ北部のバイト・ラヒアにあるアル・シャイマ地区は、イスラエルによる複数の攻撃を受け、アル・ガルバン一家は襲われました。アハメッドと弟のモハメッドは、イスラエル軍によって「レッドゾーン」とされた自宅から避難し、安全な場所に向かっていました。荷物を持って馬車で移動中に彼らは攻撃の犠牲になった。アハメッドはこう振り返る。「私のそばを離れなかった弟の手を握っていました。近所が爆撃された後、私たちは馬車に乗って家財道具を運んで安全な地域に向かっていました。」

病院で目を覚ますと、両足が切断されており、弟のモハメッドと叔父をイスラエルの攻撃で失っていた。

### 毎日100人の火傷患者、70%は子どもである 国境なき医師団（MSF）

イスラエルによる攻撃が再開された3月18日以降、特に子どもの火傷が急増している。爆弾の爆発、放火などで、多くの子どもたちが重度の火傷を負っており、複数回の手術、創傷ケアなど、緻密で長期的な治療が必要であるが、医療制度の崩壊と、必要不可欠な援助を遮断するガザ包囲網により、患者はほとんど救済されることなく激痛に耐えている。

## ミャンマー大地震における現地支援

松山教会 ピーター・ジャ・レ神父

大阪高松大司教区カトリック松山教会では、2022年のミャンマーにおける軍事クーデター以来、ミャンマーの人々と連帯し、ミャンマーの平和と世界の平和のために、聖なるロザリオの祈りや聖体礼拝などの祈りの集いを行ってきました。同時に、ミャンマーの人々、特に松山教会担当司祭ピーター・ジャ・レ神父の故郷であるカヤー州を中心に、長引く内戦の影響を受けている人々のために献金を集め始めました。これらの義援金は、この地域で宣教活動をしているドミニコ会司祭たちに送られ、青少年の教育(学校建設・運営)や、高齢者や子どもたちのための食糧や薬品のために使われました。このような慈善活動や、ミャンマーで起こっている避難民のケアなど、ドミニコ修道会がどのような活動をしているのかをお伝えしたいと思います。

### FRIARS' AID MYANMAR について

Friars' Aid Myanmar (F.A.M)は、ミャンマーの聖ドミニコ修道会・ロザリオ聖母管区ミッションの指導の下、貧しい人々や恵まれない人々に奉仕するカトリックの非営利・非政府組織です。私たちはミャンマーにおいて、宗教、人種、民族、性別に関係なく、人権、教育、保健医療、生活、人道支援、緊急救援サービスの促進を通して、最も弱い立場にある人々と共に働くことに献身しています。それは、聖ドミニコ・デ・グスマンに倣い、自分の貴重な書物を持って飢えた人々のために食糧を買い、真理の中の慈善と慈善の中の真理を立派なものにする、恵みの伝道者としての召命を受けているからです。

私たちのビジョンー 私たちの使命は 貧しく弱い人々のための優先的選択 (Preferential Option) を宣べ伝え、ミャンマーで最も弱い立場にある人々の叫びに応える共同ケアの文化を創造するよう召されています。F.A.Mの使命は、様々な状況で困っている人々に奉仕すること、人間の尊厳を促進すること、そして他の善意の人々に同じことをするよう呼びかけることです。

私たちのプログラムは教育、医療、生活、人道支援、災害などの緊急対応があります。ミャンマーのドミニコ会の神父様とシスターたちは、ミャンマーで2022年に起こった、ミャンマー軍のクーデターの影響を最も受けているピーター・ジャ・レ神父の故郷で、救援活動をされています。彼らはまた、(国軍の攻撃から逃れて)ジャングルに住む人々を助けるために、他の人々からの援助や寄付を必要としています。例えば、お年寄りや病人、小さな子どもたちに食べ物や薬を提供することです。また、ジャングルには教育施設がないため、この救済活動を行うために多くの資材を必要としています。ミャンマー・カヤー州のロイカウ教区の信者はみな紛争を逃れるために深いジャングルに逃げ込んでいます。カヤー州のロイカウのジャングルにあるドミニコ修道会が教育施設としている、シエナの聖カタリナ学校には難民キャンプ (IDP) から多くの学生が通っています。ここでのドミニコ会の修道士とシスターの使命は、生徒たちに将来、より良い生活を与え、善良な人間に育てることです。

### 壊滅的な打撃をもたらしたミャンマー大地震

2025年3月28日、ミャンマーで観測史上最大規模の地震が発生しました。マグニチュード7.7のこの地震はサガイン地方を襲い、震源地は同国第2の都市マンダレー近郊でした。この地震は壊滅的な結果をもたらし、広範な被害、数千人の死傷者、人道的危機をもたらしました。マンダレーとその周辺地域は災害の矢面に立たされ、病院は倒壊し、電気や水道といった必要不可欠なサービスが中断しました。マンダレー市内の影響は深刻で、多数の高層ビル、パゴダ、モスク、教会が倒壊しました。複雑で困難な復興作業が地震の余波を実感させました。当面の優先課題は、捜索・救助活動、負傷者への医療ケア、生存者の食料・水・避難所の確保でした。国際的な援助が殺到しましたが、壊滅的な規模とこの地域の継続的な課題が救援活動を複雑にしています。マンダレーにあるドミニコ修道会の聖マルティン・デ・ポレス学校のコミュニティも被災しました。すべての建物に大きなひび割れや小さな亀裂が入っていま

す。しかし、他の場所に比べれば、はるかに恵まれていて、海外からの援助や寄付、州内のいくつかのコミュニティや個人の寄付を受けた後、F.A.Mは特に被害の大きかった地域の地震被災者を訪問し、寄付をするために行動しています。F.A.Mは、すべての援助が最も必要としている人々に届けられるように活動しています。

ドミニコ修道会の神父様とシスターたちがミャンマーで救援活動を行っている写真を掲載いたします。特にカヤー州の教育施設と3月に起こったミャンマーで地震の救済活動の写真です。



### ミャンマーへの送金

松山教会に集まった献金は専用の銀行口座に入金しています。現地で支援活動をしている神父様とジャ・レ神父が連絡を取り合い、現地の神父様がATMのある場所まで行けるタイミングに松山からその都度、15万円～20万円くらいを送金します。(ミャンマー通貨で5百万チャット分) インターネットの発達で日本から送金したお金はすぐにミャンマーのATMで引出しできるそうです。松山教会では募金専用口座残高を月1回、財務委員が確認し、評議会で報告しています。これまで、2022年から始めた教育支援と医療・生活支援のため5回送金しています。

### 大阪高松大司教区の皆さんへ

松山教会のミャンマー支援報告をお読みいただき、ありがとうございました。

ミャンマーでは、クーデターによって、国民は疲弊し、支援が必要とされている中、大地震でさらに困窮しています。松山教会の活動に賛同し、松山教会に送金していただければ、責任をもって確実に現地に届けていただけますので、ご協力ください。

松山教会からの支援金は、「教育・生活・人道支援」のため、また、「地震など災害緊急対応」のために、大切に使われます

お問い合わせ・連絡先：カトリック松山教会事務所 ☎ 089-921-1849

[0003matsuyama@gmail.com](mailto:0003matsuyama@gmail.com)

愛媛銀行 本店営業部  
普通預金 1351157カトリック松山教会  
社会活動委員会 代表：柏原 勝利

## 事務局こぼれ話

ビスカルド<sup>あつこ</sup>篤子

### 4月25日 110番通報！

夜7時過ぎ、退勤支度をしていると、シナピスホームに住むTさんが現れました。Tさんは事情があって、入国管理局の職権（保証金なし、保証人なし）で仮放免許可された人です。ただこれは一時的な措置で、Tさんは「監理人」を見つけるよう入管から指示を受けていました。このたびTさんは監理人を見つけてシナピスホームを退所することになり、その挨拶に事務所へ来てくれたのでした。

Tさんは監理人になる人と一緒にやってきました。私はその監理人を名乗る男と二言三言交わしましたが、その人に怪しさを感じ、極力発言を控えるようにしました。「他にもこんな仰山おるんやろ、ウチ全部面倒見たるさかいによこして下さい。」彼の言う「こんな」はTさんのような仮放免の立場の人を指していました。「全部面倒見たる」と聞いた瞬間、この男は就労禁止の仮放免者を働かせて利益を吸い上げる「貧困ビジネス」の関係者だと直感しました。私は思わず「T君、嫌だったら行かなくていい」と言いました。この一言に男が「そらどうゆうこっちゃ！」と声を荒げました。

会話がかみ合えば私も議論に乗りますが、その人とは言葉の受け答えが成立しない上に、Tさんを蔑む言い方をしたため私は怒りを抑えつつ「お帰りください」とだけ繰り返しました。男は「オラ帰らんぞ！絶対出ていかんぞ」と居直ってきました。「警察呼びますよ」「呼んでみい、ワシかて警察呼んだる！」理由不明の発言を横に私は110番通報しました。通報中、男は私のそばで大声で喚き散らし通話を妨害してきました。警察は「直ちに出勤します」と電話を切りました。すると男は「T君、外で30秒だけ待たる。ワシについてくるんかここに残るんか決めろ」と言い捨ててシナピスから出ていきました。「T君、あの人はどういう人？」と私は尋ねましたが、Tさんは、顔を歪めてしばらく黙ってから「お父さんみたいな人」と答え、男の車に乗って去ってゆきました。



その直後に警察官が到着しました。事の顛末を話すと警察官は「危険でした。これからは躊躇せず110番してください」と言いました。

守ってほしいのは、私だけでなくTさんも、ですが、その時思ったのです。「市民扱いされない立場の人」は守ってはもらえないのだと。闇夜に消えたTさんが人間の扱いを受けて生きてくれることを願うばかりです。

入管の監理措置制度は弊害の多い内容で、法の見直しが必要だと思います。

## 5月9日 なにごとも、会ってナンボの世界です

関西万博では、国連もパビリオンを出しているそうです。その仕事で来日した国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）の副高等弁務官が、関西の NGO に会いたいと希望し、交流会が開かれました。

仲介した人によると「せっかく大阪で万博が開かれているので、関西の NGO に特化して活動や課題について知りたい」との国連側の要請があったそうです。その席にシナピスも呼ばれました。

意見交換会で副高等弁務官は、各 NGO からの報告を熱心に聞き、最後に率直な感想と OHCHR の役割を語りました。ヨルダン出身の彼女は笑顔の素敵な人でした。「国連は今、各国からの拠出金が減少し人員も削減され、厳しい状況にある。世界的にも人権を後退させるなか、現場で活動する皆さんと連帯していきたい。」地域で細々と活動を続ける私たちに副高等弁務官は温かい声援を送ってくれました。

交流会では、同じ関西でも私の知らなかった NGO もあって、互いに挨拶を交わしただけでも活力が湧くような明るい空気に包まれていました。各方面で活動を続ける人たちに出会い、私も勇気づけられました。

折しもこの日は未明に新教皇レオ 14 世が誕生した日です。シナピスがカトリックの団体だと知る人たちが「新教皇もフランシスコさんの路線の方だそうですね」「シナピスの活動がこれからも変わらず続きますように」と声をかけてくれ、意外にも教会の動きとシナピスの活動を結びつけて見てくれている人がたくさんいることを私は嬉しく思いました。

## 5月14日 真夜中のSOS

午前 1 時半、シナピスの携帯電話が鳴りました。心地よい眠りから叩き起こされて電話を取ると、相手は名乗りもせずに「会社の人に暴力されて逃げたんですけど、どしたらいいですか」と言うのでした。安眠妨害された私はぶっくら棒に「今、どこですか」と尋ねました。「福岡です。」

福岡！ここは大阪やがな！福岡の誰かを頼ってよね、と私は電話を切りそうになりましたが「どこかけてもつながらないです」との言葉に私はやっと目が覚めました。

そりゃ真夜中だもん、どこも電話は繋がらないよなあ。致し方ない。私は電気をつけて座り直しました。話を聞くと、会社の上司に首を絞められる暴力を受けた若い女性が日本語のできる友人の所へ逃げ込んできたとのことでした。本人の希望をよく聞いて、日本語のわかる友人と一緒に警察に被害届を出し保護を求めることにしました。困ったらいつでも私に電話するように言いました。

危なかったあ、私。真夜中の電話は滅多にないので構えも備えもしていませんでした。熟睡している最中に名乗らぬ電話でいきなり起こされると、不機嫌丸出しになって話も聞かずに切るところでした。



翌日、女性の友人から無事を知らせるショートメールが届きました。あの時、「明日にしてください」と電話を切ったら被害者も友人も奈落の底に突き落とされたところでした。私は胸をなでおろしました。

活動へのご支援ご協力を  
よろしくお願いたします。



お米、カップ麺、日持ちのする食料品、  
家電製品のご寄付をお願いします

お電話をお待ちしています！！

☎06-6941-4999



### シナピスホーム (カフェ)

6月の予定

カフェ：14日、21日

★土曜日の13時頃～16時頃

ランチ：28日

★土曜日の11時頃～16時頃

★ランチは要予約

(電話) 080-8940-8847



◀◀◀ HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

「ニュースレター配布停止」、  
「点訳版の郵送」をご希望の方は  
シナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784

### あとがき

シナピスの事務所は、現在専従3人とパート1人、曜日によって数々のボランティアさんに助けられ、とても盛んに意見交換が行われ、なんてことのない日常の話から、とても重い話まで「普通に」コミュニケーションがとられ、専従2人だった時の事を考えると、とても活発に動けて、相談しながら共に前を向いて活動できるようになりました。その「普通」に意見交換ができる環境が当たり前ではないということを知っている私は、毎日いろんな話をしながら聴きながら、直接話せるっていいなといつも思っています。

私は対話をとても大切にしています。意見交換は最たる例ですが、いろんなことがあっても話し合っ解決することも多いですね。その人から発する「言葉」はその人自身です。対話をする事によって、その人を理解することができます。言葉で傷つけられたりするけれど言葉で救われることも多いし、気付くことができる。出逢って対話してわかりあうということは、神様がくださったプレゼントです。シナピスが対応するさまざまな問題は、人生観をも覆すとても重い辛いことに直面することも多いのですが、スタッフ同士や、関わってくださる方々と対話をして、「ああ、人っていいな」「生きてるな」と実感できることもとても多いのです。6月に開催される「社会福音化部門のつどい」は、賛否あるとは思いますが、対面のみで開催されず。言葉を大切に実際に人と出会い、触れ合っ一緒に勉強し、ともに活動していく力になりますようにと祈りながら準備をしています。たくさんの方の参加をお待ちしています。(なおこ)

### ▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

#### ◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等  
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ  
機関誌としてシナピスニュースを発行

#### ◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

#### ◆学習会研修会の企画

#### ◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

#### ◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、  
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

#### ◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

#### ◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

### アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



#### ●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

#### ●車でお越しの場合

阪神高速 13 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

### 活動へのご支援ご協力をおねがいます

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

